セルタンの月

江波戸　昭

ブラジルへ行ったらノルデスチ（東北地方）へだけはどうしても行きたかった．その理由は二つある．第一はこの地方で生み出され，ブラジルの代表的民謡として，かのトラップ・ファミリーやピート・シーガーなども歌っている「ふるさとの月」Luar do sertão を，かつて私たちの手で訳し，本邦初演（1960年11月）をしたことがあるからだ．私の兄貴分にあたる東大の大野さんが，最初のアマゾン調査から帰国して，これぞノルデスチからの出稼ぎ労働者の歌として教えてくれたのが，そのきっかけである．

第二はその十数年後，1976年にこれも兄貴分の西川さんが訳されたジュリアンの『重いくびきの下で』（岩波新書）の冒頭の一語〝カンバーン〟の響きにうちのめされたからである．カンバーンとはもともと，ノルデスチで収穫されたトウモロコシの実と葉をむしりとって転がした茎，また牛の首かせからぶら下がった木の棒などを指す．それが転じて，この地で植民初期に展開した大土地所有制の下に隷属させられた奴隷的身分の農業労働者を意味するようになった．そのカンバーン→出稼ぎ労働者の地は，現在どうなっているのだろうか．

幸いにして，昨1982年の８月，ブラジルで開催された国際地理学会の中間会議で，私が参加している農業・農村部会が，ノルデスチの一角，セルジッピ州の州都アラカジュで行なわれるというので，これぞ千載一遇のチャンスとばかり，のりこんだのだった．

大西洋に面した人口12万の田舎町アラカジュの町はずれ，スラム的なファベーラを抜けた田園地帯に新設された州立大学での会議そのものは，母国語ポルトガル語が異常に巾をきかせるといった，国際会議とは思えないような，ラテン的で，のんびりとしたおおらかさで進められ，いささか戸惑いを感じたが，会議場外での催しや巡検はさすがに大へんに楽しさにあふれていた．

３日目の夜だったか，日本ではその名もほとんど知られていない，およそ観光的要素をもたないこのアラカジュの町の〝観光協会〟エムセトゥール後援の野外カクテル・パーティが催された．カクテルとはいえ，その場で飲み放題で供されたのは，ブラジルのさとうきび焼酎ピンガをライムやマラクージャ（パッション・フルーツ）の果汁で割ったもの，日本の梅割りそのものの民衆的飲みものである．

そして登場したのが，協会の専属的楽団か，名も同じ〝エムセトゥール〟の黒人系６人組だった．手にした楽器はいかにも西アフリカ的で，肩から斜に吊した大小の両面太鼓のタンボール，タンバリンのパンデイロ，バンジョー風の丸胴の弦楽器に横笛，あとは簡単な体鳴楽器といったところで，歌も歌う．まさに素朴なサンバやバイヨンの原型を髣髴とさせる演奏がつづいた．傍らにいたコミッションのオルガナイザー役のディニーズ教授に，〝このリズムの名は？〟と尋ねたところ，〝コルタ・ジャカCorta Jacaで，古いリズムの一種だ〟とのことだった．帰国して調べたところ，この語はサンバ用語の一つで，〝小刻みにステップを踏むこと〟とあった．

なんといっても地理学会の会議のハイライトは巡検にある．その第１日は隣接するバイア州との州境近くのセルタン行だった．いよいよセルタンに足を踏みいれるのだ．案内だか便乗だかわからないが，地元の大学生たちを含め70人ほども乗せた２台の大型バスは西へと向った．

ノルデスチでは一般に，海岸から奥地へと三つに地帯区分される．海岸近くの森林地帯はメタまたはマッタmeta, matta と呼ばれ，ポルトガルからの入植者たちが18世紀からサトウキビのプランテーションを開き，インジオそしてネグロの労働者をこき使ったところだ．つぎがアグレスチ agreste と呼ばれる中間の半乾燥の潅木林地帯で，

マンジョーカやトウモロコシ，フェジョン豆，それにオレンジやマラクージャなどの果樹を栽培する中小地主支配の地，そしてその奥が乾燥地のセルタンsertãoで，ラティフンディオの牧場がえんえんと広がる一帯だ．ただ残念なことに，8月は真冬で雨期だったから，緑は多く，常襲旱魃地というイメージとはおよそ遠いものだった．しかし，入口の標識からはるかかなたにみえる牧場主の豪華な大邸宅と，農園労働者のモカンボ（掘っ立て小屋）との対照は鮮かであった．

ただ，ジュリアンの描くカンバーンの実態は，とてもこのような巡検でつかみとれるものではない．しかも，生産関係にはあまり関心を示さない地理学者の悪癖のためか，外国人に恥部をあらわにしたくないという慮りのためか，そのような本質に立ちいっての案内者たちの説明はまったくなかった．

第2日の巡検は，アラカジュ以前の州都，ブラジルで4番目に古く，1590年に開かれたというサン・クリストヴァンをはじめとするメタ地区の古都めぐりだった．イベリアの田舎町そのものの風情をみせるそれらの町の一つ，ラランジェイラスには「アフロ・ブラジル博物館」があり，植民初期からの黒人関係の資料が数多く陳列されていた．なかでも，さる一室の壁にかけられた二枚の古い絵画が私の注意をひいた．先頭に立つ貴婦人的な黒人女性に従った女性たちが，それぞれに西アフリカの楽器を手にしているのだ．鍵盤の下にヒョウタンのつけられたバラフォン（木琴）など，もしこの絵がノルデスチでの往時の状況を描いたものだとすると，バラフォンから中南米のマリンバへの伝播の疑点を解明する強力な証拠となるにちがいない．

サン・クリストヴァンでは，広場に面した小さなレコード店をのぞいてみた．うっすらと埃をかぶって，バラバラと並べられているレコードの多くがルイス・ゴンザーガのものだった．日本では往年の〝バイヨンの王様〟ぐらいにしか思われていない，ジュリアンと同じペルンブコ州出身のこの吟遊詩人は，その地元スタイルの衣裳とともに，今でもノルデスチはもとより，ブラジル全土で広く民衆に親しまれている存在だ．もちろん，私もその店でゴンザーガを3枚ほど，それも800クルゼイロ（約800円）で，いぶかりながら買った．というのは，大都市のレコード店では1枚1,500クルゼイロが定価だからだ．中古盤でもなさそうだし，と考えているうちに，ハタと思いついた．これは昨年の仕入れ値そのままなんだな，と．ブラジルのインフレはこの1年で約2倍というすさまじさで，このお買得品はまさにそのあかしだったのである．

アラカジュを出て，リオの本会議に向う日の朝，宿舎グランド・ホテルのロビーに流れていたのは，奇しくもゴンザーガの「ふるさとの月（セルタン）」だった．

（明治大学）

私の地理学事始め

河辺　宏

今から35年前のことです．大阪府吹田市で生まれ育った私が，生まれてはじめて東京に来たのは．季節は12月．住んだのが杉並区高井戸で，今とは違って，畑が沢山ありました．毎朝手ぬぐいが凍って，棒のようになっていました．生まれてはじめての経験です．東京は寒いところだというのが当時の印象です．学校へは10分程度の道を歩いて通いましたが，学校までの道は霜柱が融けてぐちゃぐちゃとなっていました．勿論舗装などしてありません．自転車ではとても通えません．タイヤに泥がくっついて動けなくなってしまうからです．

学校の運動場も昼間はぐちゃぐちゃでした．ぐちゃぐちゃな道や運動場などというものは大阪にはありません．東京とは何とひどい所だろうと思